

取組実績の概要 【2ページ以内】

本事業は、新潟大学、福島大学、アンカラ大学、エーゲ大学、中東工科大学の連携5大学からなる防災を意識したレジリエントな農学人材養成を目的とし、「**グローバル農力養成プログラム**」と「**グローバル防災・復興プログラム**」のもと、相互学生交流を実施した。2015年度からの事業において、学生交流プログラムを実施できるよう、新潟大学、福島大学がそれぞれトルコ側連携大学と大学間交流協定の更新や新規締結を行った。さらに新潟大学では、本事業独自に部局間でトルコ側連携大学とそれぞれ事業のニーズ（受入・派遣人数等）を合わせた覚書を締結した他、アンカラ大学と中東工科大学とは、エラスムス+協定及びメブラーナ協定を締結することで、事業期間終了後も学生が何等かの奨学金のもと両国間で派遣できる仕組みを構築した。エラスムス+協定のもと、2020年2月には新潟大学農学部学生2名の中東工科大学への派遣を果たした（この2名の学生は「大学の世界展開力強化事業」における開講科目を履修せず、また中東工科大学では科目等履修生として在籍したため、本報告書の派遣人数には加えていない）。

それぞれのプログラムにおいて**短期**（学部生及び博士前期課程学生対象）及び**中・長期**（博士前期・後期学生対象）交流を設け、全体の交流実績数は、日本人派遣学生92名（新潟大学及び福島大学の正規課程に在籍する外国人留学生3名含む。計画96名。なお、タイに代替派遣した際にトルコからも学生8名を招へいたため、実質の派遣実績数は100名。）、受入93名（計画96名）を記録した。短期派遣プログラムにおいては、夏期に加えて冬期にも実施した。なお、派遣学生には帰国後も英語学習を継続させ、TOEICの受験を課した。新潟大学・福島大学を合わせて、事業参加学生の46%がTOEIC600点以上を取得し、15%が730点以上を取得した。TOEIC600点を取得できなかった学生には英語力向上のための学習を個別に推奨した結果、学内の英語能力向上サービスFL-SALCの活用や、ライティング能力を伸ばすために自身の書いた英文の添削を統括センターに願い出る学生が出てきた。TOEIC600点以上80%、730点以上40%という目標は達成できなかったが、900点近いスコアを得た学生や、派遣前後で300点近くスコアアップさせた学生もおり、留学経験が語学力向上への意欲に繋がったことは明白である。また、短期派遣プログラムに参加した学生の中には初めての海外経験となった学生も多かったが、帰国後にトルコあるいは他の国への留学希望を表明する学生が多数おり、実際にトルコに再度中・長期留学した者がいた。

① **短期派遣プログラム**では、事業開始当初はトルコ国内の情勢不安の影響で、日本からの学生をトルコに派遣することができなかったが、第3国であるタイのチェンマイ大学にトルコからも教員と学生を招へいして派遣プログラムを実施する柔軟な対応を取った。これにより、日本・トルコ・タイの3か国間にある農業の違いを学ぶことができた他、トルコからの参加者にとっては、それまで縁のなかったチェンマイ大学との新規交流の場となった。安全管理や連絡体制に関して日土間で十分に検討し、2017年3月に初めて日本から学生をトルコに派遣することが可能となった。派遣プログラム実施前には新潟大学及び福島大学で入学・進級ガイダンス時に本事業の紹介を行った他、本事業向けの留学ガイダンスを4月末に開催したところ、毎年、両大学で合計約200名超の学生が参加し、募集人数を大きく超える応募があった。学習意欲が高く、英語能力TOEIC600点相当以上を有し、協調性のある学生を選抜するため、申請資料（自己アピール含む）や英語での面接により学生を選抜した。福島大学からの参加学生には新潟大学の特別聴講学生の身分を与えた上で派遣し、プログラム修了要件を満たした学生には新潟大学の3単位を付与し、福島大学で単位互換（単位互換協定締結済）を行った。

② **短期受入プログラム**においては、事業開始当初から目標人数を達成できた。また、短期プログラムに参加した学生が中・長期学生として新潟大学に留学し、企業訪問の際に同企業への就職を希望して、後日インターンシップを行い、その後正規雇用されたケースもあった。さらに、本プログラムの参加実績を活かして日本企業のトルコ支社への就職を実現した学生もいる。学生受入時には、日本人学生チューターを配置し、生活支援に配慮するとともにトルコ人学生のインターンシップにも同行させた。また、トルコ人学生の健康状態を教職員が適宜確認し、異常時には即座に対応した。受入プログラムでは、全てのトルコ人学生に新潟大学の特別聴講学生または特別研究学生の身分を与え、各プログラム科目の履修と、帰国前に開催した報告会での課題発表に基づき単位を付与した。日本の単位のECTS単位への互換に関する協議を行い、トルコ側において新潟大学で付与された単位が認定された。また、本事業の福島での受入プログラムでは、トルコ側連携3大学及び福島大学の学生らが、東日本大震災・東京電力福島第一原発事故の被災地の現状、農産物の放射能被害、再生可能エネルギー、福島第一原発の廃炉作業などについて共に学習した。その際、未曾有の災害にも対応できる農業のグッドプラクティスの視察や、農作業などを実体験した。また、再生エネルギーで最先端に行くイノベーションコーストでのフィールドワークや、避難指示解除後の地域で活動をする住民

との意見交換を行うなどして、グローバルな「アクティブラーニング」を実施することができた。

③中・長期派遣プログラムでは、本事業全体で新潟大学から学生5名がアンカラ大学、エーゲ大学、中東工科大学にて研究活動やインターンシップ等を行った。トルコでの生活の中で、英語だけでなく、トルコ語も学び、流暢なトルコ語を話せるようになった学生もいる。また、現地トルコ人学生や別国からの留学生とも交流を持ち、共に学習・生活することで学生の世界観を大きく広げることができた。

④中・長期受入プログラムでは、本事業全体でトルコから30名の学生を新潟大学に受入れた。事業開始当初は学生のトルコ国外への移動に制限があったために目標とする受入人数を達成できなかったが、制限が解除された3年目以降は目標人数を達成することができた。事前に学生と新潟大学側指導教員の分野のマッチングを行い、研究内容の打合せを行った上で学生を受入れたことにより、満足のいく学びの機会となり、再度新潟大学で正規学生として研究活動を継続する学生が多く出た。日本の大学の充実した研究施設やトルコの大学とは異なる指導方法が学生らにとっては研究意欲を高める結果となっていた。また、各指導教員が学生のインターンシップ先を手配することで、学生の研究分野に近い職種や業種の体験が可能となった。学生らはインターンシップ先との積極的な質疑を通して、トルコとの違いを体感し、農業や防災に関する日本の取組みを母国でどのように活かせるか真剣に検討した。

⑤シンポジウム等：2016年11月には新潟大学の発案で、同時期に大学の世界展開力強化事業（トルコ）に採択された東京大学及び東京藝術大学を新潟大学教職員が訪問して情報交換等を行うとともに、3大学グループ間での協力体制を確立した他、日本・トルコ協会に本事業への協力を依頼した。同月にはトルコ人学生との文化・研究交流を目的に、当初トルコに派遣予定だった新潟大学生による**本事業独自のサークル**を立ち上げた。彼らは2019年1月に新潟大学で開催した「FD及び学生合同ワークショップ」において英語による課題発表を行い、来日したトルコ人学生と交流活動を行った。国際プロジェクト運営委員会改め国内運営委員会を2016年4月及び9月に新潟大学で開催し、福島大学の担当教職員とともに、特に短期受入プログラムで精査すべき点や改善策案を検討した。また、日土5大学が参加した事業推進打合せを2017年1月及び2月に新潟大学で実施し、トルコ情勢について意見を交わし、より安全な研修ルート、現地での学生の安全確保を中心に検討を行った。さらに、2017年3月には新潟大学及び福島大学教職員がトルコを訪問してセキュリティが強化された学生宿舎や大学構内を見学し、現地大学の安全対策を実地で確認した。なお、2017年度には「第1回GLocal Age 2020シンポジウム」及び「第2回GLocal Age 2020シンポジウム」を新潟大学で開催した。特に第2回では、学内だけでなく、東京大学や東京藝術大学の「大学の世界展開力強化事業」担当者も招へいして、それぞれの大学における取組みを紹介してもらい、情報共有を図った。2019年3月には一般市民を対象とした**市民講座**を開催し、トルコの農と食についての講義の他、トルコの茶菓の実飲・実食を組み込んだ。参加者からは特にトルコ人・日本人学生が協力してトルコ茶を伝統的に入れる姿に感銘している様子がうかがえ、講義に関しても多くの質問が挙がった。また、2019年7月には新潟大学の発案により、「大学の世界展開力強化事業（トルコ）採択校合同シンポジウム」を東京大学で開催し、各国内大学とトルコ側連携大学の教職員や学生による取組みや今後の展望を情報共有することにより、新たな交流や事業終了後どのように交流を継続するかなど、互いに学びあうことができた。全てのシンポジウム等のイベントには外部評価委員が出席し、本事業の取組み内容に関する発表に基づいて、外部評価委員会で評価や改善点について意見をいただき、次年度の事業内容改善に繋げることができた。

【本事業における交流学生数の計画と実績】

(単位：人)

	2015年度		2016年度		2017年度		2018年度		2019年度		合計	
	派遣	受入	派遣	受入								
計画※	2	2	21	21	21	21	26	26	26	26	96	96
実績	0	3	15	16	22	22	29	26	26	26	92	93

※海外相手大学を追加している場合は、追加による交流学生数の増加分を含んでいる。

特筆すべき成果（グッドプラクティス）【1ページ以内】

【**受入**】来日前にスカイプを利用して担当教職員とお互いに面識を得た。来日後は新潟の稲作やバイオテクノロジー等に関する講義の他、水田や農作物への取組みや水害対策を学び、さらに新潟県中越地震の被災地、地滑りや雪崩発生地を見学し、新潟及びトルコにおける農、食、防災に関わる課題の比較・検討を行った。講義・実習の際には日本人学生が授業補助としてトルコ人学生からの質問に答え、互いに興味ある分野について積極的に話し合う場面が多く見られた。福島大学では、東日本大震災の被災地を訪問し、現在も復興に向け奮闘している地域住民や福島県内の幼稚園児、ホームステイ先の家族との交流を実施した。その生の声を聞くことにより、福島に対する不安や誤解が解け、正しい情報を得ることの大切さを学んだ。また、受入学生のバディ学生として、各プログラムに10名前後の日本人学生を同行させた。さらに、2016年度にはアメリカ・ドイツ・オーストラリアからの学生20名も含めた多文化混住型国際プログラムとして実施し、グローバルなアクティブラーニングを実現した。このように、トルコ人学生にとって日本での学びが貴重な「収穫」となった他、日本人学生や他の留学生との交流を通して多様な世界観に触れることができた。本事業に参加した学生の中には、帰国後更に別国の留学プログラムに参加した者や、国費外国人留学生として新潟大学や日本の他大学に正規入学した者、来日して日本企業に就職した者が現れた。また、トルコ国内の人気テレビ番組Millionaireに出演し本事業を通して学んだことや日本に対するイメージの変化について語ることで本事業のトルコ国内での周知に貢献した学生もいる。

【**派遣**】派遣学生が積極的にトルコで発言や質問ができるよう、受入プログラムの後に派遣プログラムを行った。派遣前にトルコ人学生と交流させることで、英語でのコミュニケーションに慣れさせるとともに交友関係の確立を狙いとした。これにより派遣時に現地教職員に加え、顔見知りの現地学生によるサポートも受けることができる体制とし、派遣学生の積極性を引き出すことができた。また、事前学習では、事件・事故時のシミュレーション等を行い、全員同一の海外旅行保険への加入とたびレジ登録を徹底し緊急時に備えた。さらに、緊急連絡網に加え、派遣学生、引率教職員及び日本待機職員間でSNSグループを作り、モバイルWiFiを携帯させて随時相互連絡が可能な体制を整えた。派遣期間中は、毎日引率教職員から日本待機職員に学生の状況を報告させ、学生の安全を確認した。また、派遣中の英語プレゼンテーションに備え、「スピーチ・クリニック」等の英語力向上やプレゼンテーション資料作成演習や発表練習、質疑応答のスキル向上を図った他、トルコ語の練習や異文化適応演習も行い、円滑な人間関係の構築に役立った。派遣学生の中には、トルコ派遣中に訪問した日本企業のトルコ支社で出会った社員の話に感銘を受け、帰国後同企業に就職した者もいる。また、別の学生はトルコに長期留学しトルコ語も流暢に話せるようになったことから、中東地域と関連のある企業に就職した。派遣プログラムでは、新潟大学に設置した本事業独自の科目を履修する形で学生派遣した。事前に学生及び保護者から確約書の提出を求めて理解を得ることで、大学と保護者の信頼関係の構築に努力した。福島大学では、参加学生が留学フェアなどでトルコについて発表を行い、その結果、2019年度からは本事業外でも交換留学生を毎年トルコに派遣している。

【**シンポジウム**】本事業の集大成として新潟大学の発案により、2015年度に同時に採択された東京大学・東京工業大学、東京藝術大学、新潟大学・福島大学及び各々のトルコ側連携大学の学生と教職員が一堂に東京大学に集結し、2019年7月に「大学の世界展開力強化事業（トルコ）採択校合同シンポジウム」を開催した。基調講演に加え、事業参加学生による発表や成果報告（口頭・ポスター・作品発表）を行った。新潟大学・福島大学チームの発表では、派遣プログラム実施前のプレゼンテーション資料作成や練習、実際の派遣プログラム時の帰国前発表会の経験を活かし、英語にトルコ語を交えた分かりやすい発表が行われ、聴衆を魅了した。本事業参加者の成長が大きく感じられ、外部評価委員や他の参加者からも高い評価を受けた。また、各大学の特徴を生かした取組みや成果の共有や開催までの協力体制や互いの意見を尊重するコミュニケーションのもと、日本・トルコ間だけでなく、国内大学間の繋がりも構築できた。

【**成果**】本事業参加学生のキャリアパスに繋がっただけでなく、新潟大学では2019年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択され、今後トルコをはじめとする中東地域から正規学生の受入が可能となった。福島大学では2020年2月にNPO法人日本トルコ文化交流会「第6回エルトゥールル号からの恩返し日本復興の光大賞20」特別賞を受賞するなど、本事業の成果が大きく評価されている。また、アンカラ大学、エーゲ大学、中東工科大学との交流が主であったが、派遣プログラムで訪れたアクデニズ大学やナミックケマル大学との新たな繋がりができ、近い将来大学間協定を締結し学生交換ができるよう協議を開始するなど、本事業がさらなる未来の世界展開に貢献している。